

四国 88 ヶ所・お遍路に関する調査研究

～文化遺産として後世に残すために必要な機能とは～

高知工科大学 学生会員

○越智 淳

高知工科大学 フェロー会員

草柳 俊二

1. 序論

四国 88 ヶ所を 1 番札所霊山寺から 88 番札所大窪寺まで、通し打ちと呼ばれる基本のルートで巡ると約 1,300 ～ 1,400 km の長い道のりとなる。年間約 150,000 ～ 200,000 人の人がお遍路となって四国を巡っている。お遍路は四国にとって大切な観光資源でもある。巡礼の方法はバス、バイク、自転車、そして徒歩である。巡礼者たちは安全にお遍路ができているのであろうか。書店で販売している書籍では巡拝用品の説明や各札所の説明、巡拝用語の説明等が記載されているが、安全に巡拝するための道は詳しく記載されていない。また、天候不良や道路の規制等により通行不可の場合の迂回路も記載されていない。

実際に四国 88 ヶ所を巡拝し、四国 4 県の道路の整備・案内標識を調査、現状把握を行う。また、お遍路に対する意識調査のアンケートを行い、お遍路について四国 4 県内の人々の意識を把握する。お遍路が安全に巡拝できるための道路整備や、迷わず巡拝するために必要な機能の調査研究、文化遺産として後世に残すため、観光資源として整備するためにはどのような機能が必要なのかを見出す。

2. お遍路の現地調査

四国 88 ヶ所お遍路の道路・案内標識の現状を把握するために、実際に四国 88 ヶ所を巡拝した。各県の主要な国道・県道ではアスファルト舗装がされており、歩道も整備されていた。しかし、山中にある道路ではガードレールや街路灯もなく、舗装にひび割れがあり、離合できない状況であった。同じ県道でも歩道がなく、自動車の行き違いも難しい状況の道路も多くあった。また、街路灯がないため、夜間の移動は危険である。調査はバイクでの走行であったが、カーブミラーがないため対向車の確認が困難であった。これではお遍路の身

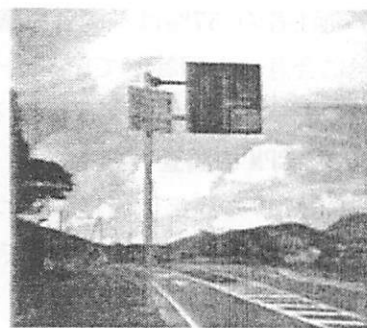


写真 1. 県道 57 号線 41 番札所付近

の安全が確保されない状況の上、いつ事故が起こってもおかしくない。国道や県道ではなく、60 番札所横峰寺の途中の私道でのコンクリート舗装の表面はツルツルしており、つぎはぎや轍が多く見られ、天候不良時にスリップの恐れや危険が予想される箇所が多々あった。

調査した結果、遍路道には統一された案内標識がないことが分かった。札所と札所の連携がとれていない事が原因と考えられる。道路幅員や路面、歩道の確保、案内標識、休憩所等の整備が不十分なため巡礼者の安全確保に問題があることが分かった。

3. お遍路に対する意識調査

県別の今後お遍路をしたいかの有無のアンケート結果では、最も多くお遍路をしたいと答えたのは徳島県であり、最も少なくお遍路をしたいと答えたのは高知県である。高知県では室戸岬から足摺岬にある札所間の距離や休憩所の有無、札所の数や札所間の距離といった物理的条件の厳しさもあると思われる。香川県と徳島県において 50 ～ 60 代以上の方はお遍路の経験者が多く、特に香川県の 60 代以上の方はお遍路の経験者が群を抜いて多い。香川県は弘法大師の誕生の地であり、お遍路の基点ともいえる 88 番札所の大窪寺があり、他県よりもお遍路に対する意識が高いと考えられる。香川県や徳島県と比べると愛媛県や高知県では経験者は少なく、特に高知県は最も経験者の少ない結果となった。

4. 文化遺産として後世に残す為に必要な方策

(1) 必要な機能の充実

2. お遍路の現地調査で説明したように山中の道路の幅員は狭く、事故の生じる危険性が高い状況である。

お遍路の身の安全を確保する為整備の必要性がある。また、道に迷わないための案内標識を設置する。案内標識としての役目を果たしていない標識があり、環境庁や他の団体、個人個人がそれぞれに設置している案内標識は統一されていないため、案内標識見やすくするためデザインの見直しや統一の必要性がある。

（２）文化遺産としての付加価値を高める

遍路道は歴史と共に位置を変化させてきた。現在の遍路道の整備と共に、歴史的遍路道を明らかにし、整備してゆく必要がある。そのために明治・江戸時代、さらに昔に設置された道標や丁石、観音菩薩像の所在地、形状、銘文等を調査して行く活動が必要である。

（３）若者による遍路文化支援組織の設立

お遍路・四国 88 ヶ所を文化遺産として確立していくためには 4 県が一体となった統括組織が必要である。四国県内の各札所付近の小学校や中学校、高等学校、大学が連携しあい、児童や学生がメインとなってお遍路、四国 88 ヶ所を文化遺産として後世に残す動きが必要である。そのため文化遺産として後世に残すためには若者の協力が必要不可欠である。

（３－１）遍路文化を支える学校における組織の構築

図 1. 組織図はお遍路・四国 88 ヶ所を統括した組織の下に各県の大学、高専、高等学校、中学校、小学校が連携したものである。また、組織の構図は大学から小学校の縦の繋がりでなく、四国 4 県の横の繋がりも図ったものである。

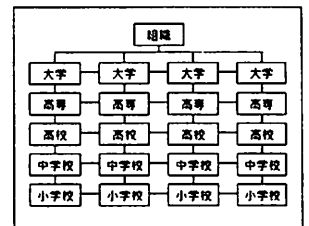


図 1. 組織図

（３－２）四国 4 県の学校をまとめる方策と活動内容

アンケート調査より香川県と徳島県はお遍路に対する意識が高いことが分かったが、意識の低い愛媛県と高知県のお遍路に対する意識の向上が必要である。高知県では小学校や中学校でお遍路に関することを学んだ学生が多かった。他の県でも小学生や中学生時にお遍路に関することを学ぶ機会を設けなければいけない。

現在、高知県には「高知県建設系教育協議会」という組織が設立されており、高等学校、高専、大学の連携組活動が活発に行われている。この活動形態が四国四県に設立し、各大学に「お遍路クラブ」設立する。この大学のクラブを中心に、各学校に呼びかけ、組織の活動を行う。大学の代表は 2 年または 3 年程度で交代させ、ローテーションとする。主な活動内容として、札所間の道路の清掃、お遍路・四国 88 ヶ所の歴史の学習、統一した案内標識の作成等とする。

（４）世界遺産登録に関すること

2000 年に四国 88 ヶ所、お遍路を世界遺産に認定させようとする団体がある。その事について他団体ではあるが某 NPO 法人に面談した。この組織はお遍路が道に迷わないために矢印や×印のステッカーを作成している。飲料水メーカーと提携し、ステッカーを自動販売機に貼り、お遍路の道しるべとしている。他にも休憩所の設置、携帯メーカーやコンビニエンスストア等と提携し、休憩、トイレ、道案内、インターネット利用、携帯電話の充電といったお接待が受けられるシステムを構築している。

数年前、「熊野古道」が世界自然遺産として、国連教育科学文化機関（ユネスコ）に登録された。しかし、文化遺産となった「熊野古道」には様々な問題が発生している。ペンキによる木や石に落書き問題や訪問者・観光客の増加によって、熊野古道が観光資源化し、乱開発によって生じる価値の損失、ゴミ問題等様々な問題である。お遍路の世界遺産登録への動きは、まず、四国 4 県民が共通の認識を持って自分たちの文化遺産として後世に残して行く考えが必要である。

5. まとめ

お遍路、四国 88 ヶ所は長い歴史を持ち、文化遺産として後世に残すことは誇らしいことである。しかし、お遍路・四国 88 ヶ所は、まだ文化遺産として十分に認知されるものとなっていない。四国 88 ヶ所を統括する組織を設けることが重要となる。道路の整備、案内標識の見直し、四国県内の学校の連携により、若者の協力、意識改革を図ることが大切である。熊野古道のような問題が生じる前の対策が重要であり、若者だけでなく、周辺住民の協力を得ることも重要となる。人々の協力によって後世に残すために必要な機能を構築する。